矛盾 -Sword & Shield- X edit

本シナリオは 2012 年に本サークルから頒布された『Neuro/CD vol.3』に掲載されたシナリオの復刻版だ。二人用シナリオとして大変好評を博した。未プレイの方には是非お試しいただきたい。（掲載日：2014.11.1）

プレアクト情報

PRE-ACT INFO

■シナリオ基本情報

▼作者

生方一寛（© ニューロ／ＣＤ製作委員会）

▼プレイヤー人数

２人

▼想定プレイ時間

４～５時間

▼シナリオタグ

２人用シナリオ、ストリート、叙情的

●このシナリオについて

このシナリオは、２人専用という非常に珍しいものだ。人が中々集まらないとき、少ない人数で遊べる事は非常にメリットになるだろう。

しかし、２人用シナリオは遊んだ感覚が普段のシナリオとはかなり異なったものになる。人数が少ないから「軽い」と思いがちだが、そうではない。実際にはもっと、密度の濃いプレイになるだろう。

●シナリオレギュレーション

本シナリオの想定レギュレーションを以下に記載する。使用するデータの変更や RL が調整を行った場合、改めてレギュレーションを提示すること。

▼使用経験点

０～ 30 点

▼達成値制限

なし（敵は単独の最大達成値 21）

▼スタイル制限

特になし

■アクトトレーラー

キャスト作成の前に、以下のアクトトレーラーを読み上げること。これはアクトのイメージを膨らませるのに役立つ。

全てを諦めた顔で、少女は言った。
「私を、殺してください」と。

全てを蔑んだ顔で、少女は言った。
「私を、護ってください」と。

だからカタナは剣を取り、
だからカブトは盾を取る。
舞台の上では綺麗な舞踏。少女と踊る死の舞踏。
剣と盾とが打ち合って、そこに現れるものは何？

トーキョーN◎V A THE AXLERATION
『矛盾 -Sword & Shield』

泣きそうな顔で、少女は言った。
「そんな運命、私は、いらない」

■キャスト作成

プレアクトシート（アクトトレーラー、ハンドアウトなど）を参考にキャストを作成すること。

●クイックスタート

本シナリオでは基本的にクイックスタートの使用を推奨しない。どうしても必要な場合、以下のサンプルキャストを使用することを推奨する。

①『カタナ』：炎の退魔師（『TOS』p48）
②『カブト』：現代の騎士（『TNX』p90）

●キャスト間対立

本シナリオは２人用である。しかも、カタナとカブトという相反するスタイルの２人が、一見対立したような状況下でストーリーが始まる。N◎VAならではの、ギスギスとしたキャスト間対立の雰囲気を演出するにはもってこいだ。

しかし、最終的には２人が協力して真の敵を倒すことになるだろう。対立の演出を楽しむのは良いが、プレイヤー間はしっかり協力し合うこと。

●必要な神業

《難攻不落（インヴァルネラブル）》には使用想定シーンが存在し、それ以外にキャストが敵の神業のみでリタイアするのを防ぐために、１個の防御系神業が必要だ。

なお、プレイヤーが２人であることから、神業の遊びはかなり少ない。神業構成次第では、プレイヤーの望む結末が得られないといった事態に落ちる可能性がある。キャスト作成はしっかりと相談をしながら行ってほしい。(*)

●情報収集について

プレイヤー人数が少ないため、２人ともが情報収集をしっかりと行える必要がある。キャスト作成の折には、〈社会〉〈コネ〉技能は推奨である３レベル以上を必ず取得するようにしよう。

本シナリオの情報収集で主に使用する社会技能は、〈社会：ストリート〉〈社会：テクノロジー〉、あるいはそれに準ずる〈コネ〉などである。(*)

■キャスト間コネクション

キャスト間のコネはお互いが交換する形で取得すること。

※プレイアビリティ・ツールについて

本シナリオは『Neuro／CD vol.3』に掲載されているシナリオの復刻版だ。

諸々の理由より、復刻版シナリオには基本的にレコードシートなどのプレイアビリティ・ツールを付属しない。シナリオイラストも掲載しない。（ゲストの顔イラストなどを除く）

イラストなどをアクトに使用したい場合、『Neuro／CD vol.3』を入手して欲しい。

神業構成と結末
結末を知るRLは、キャスト作成段階で口を挟みたくなるかもしれない。だが、できればRLは神業構成に口出しをしないで頂きたい。
プレイヤーたちの選択で描かれる結末にこそ、意味があるのだ。

情報収集について
本シナリオの情報収集は、プレイヤーが少ないので厳しくなりがちだ。代用判定などは、積極的に認めるようにしよう。

アクトハンドアウト

各キャストには右記の設定が推奨・あるいは追加される。
キャスト作成時によくプレイヤーと相談すること。

①『カタナ』：殺し屋
※他の戦闘系スタイルでの代用不可
②『カブト』：ボディガード
※他の防御系スタイルでの代用不可

①推奨スタイル：カタナ

SCENARIO HANDOUT

コネ：ルシア
推奨スート：理性

依頼があれば誰だって殺すのが商売だが、こんな依頼人に会ったのは初めてかもしれない。不治の病に侵された少女は、全てを諦めた顔でキミに言った。私を、殺してください、と。
条件は2つ。殺されたことが、誰にでもわかる状態で殺すこと。そして、殺されたことが、誰にでもわかる場所で殺すこと。奇妙な依頼人の、奇妙な依頼。だが、そこから伝わる必死の願いに、あなたはいつしか頷いていた。

【ＰＳ：ルシアの願いを叶える】

②推奨スタイル：カブト

SCENARIO HANDOUT

コネ：ルシア
推奨スート：理性

依頼があれば誰だって護るのが商売だが、こんな依頼人に会ったのは初めてかもしれない。不治の病に侵された少女は、全てを蔑んだ顔でキミに言った。私を、護ってください、と。
条件は2つ。拘束期間は、原因に関わらず彼女が死亡するまで。そして、護られていることが、誰にもわからないように護ること。奇妙な依頼人の、奇妙な依頼。だが、そこから伝わる必死の願いに、あなたはいつしか頷いていた。

【ＰＳ：ルシアの願いを叶える】

RL用テキスト

Txt 4 Ruler

■ストーリー

『①カタナ』そして『②カブト』の前に現れた依頼人、ルシア。自身の殺害と護衛、不治の病に侵され、残り少ない命を弄ぶかのように、相反する依頼をする彼女の真の目的は、自身の死が白日の下にさらされることにあった。

ある河渡系組長の隠し子として生を受けた彼女は、しかしその立場の難しさと病から、ひっそりと死んでゆくことを選ぶ。だが、彼女の主治医であり、裏社会とつながりのある男、"振り返れば奴がいる"司馬紅太郎は彼女の立場を利用し、自らが成り上がることを画策していた。

彼女の死後、手懐けたヒトニ（殺した人間と成り変わるヒルコの一種）を彼女と入れ替わらせ、組長に接近し、そして己を認めさせ、いずれは組を乗っ取るその計画は、しかし偶然、その一部がルシア本人の知るところとなる。

今までひっそりと生きてきたことを無駄にしないためにも、父を頼るわけにはいかない。ならば、自らが釈明のできない状況で死亡し、その事実が公表されれば、誰にも己の死を利用することはできなくなるはず。そのために、『①カタナ』と『②カブト』を、自身の最後の時間を共に過ごす剣と盾として選んだのだ。

キャストたちが司馬の陰謀を打ち砕き、ルシアの死を見届けることができればシナリオは終了となる。(*)

死を見届けることができれば
本シナリオは、基本的にはヒロインが死亡する事を前提として書かれている。詳しくはエンディングの項目を参照して欲しい。

■クライマックスへの条件

事件の裏に司馬がいることをキャストたちが確信し、司馬と"エインセル"を迎撃することを決めたらクライマックスへと突入する。

オープニングフェイズ

Opening Phase

●オープニング1：少女は求める、最強の矛を

シーンプレイヤー：『①カタナ』

登場：不可

◆解説

『①カタナ』のオープニング。ルシアが訪れ、自分を殺害してくれるように依頼する。(*)

自分の殺害依頼
ルシアにこの奇妙な依頼の詳しい理由を尋ねても、明確な答えは帰ってこない。
ルシアは、陰謀の黒幕の正体や詳しい内容を知っているわけではなく、確証情報も何も持っていないため、自分の死を利用しようとしている何者かがいるのではないかという疑いを口に出せずにいるのだ。
詳しく知るには、リサーチを進めてもらおう

◆描写

その日、キミの行きつけの店に現れたルシアと名乗る少女の奇妙な依頼。

それは、自分を誰にでもわかる場所で、誰にでもわかるように殺してほしい、というものだった。

依頼の内容もそうだが、それ以上に奇妙なのは彼女の表情だ。

感情のうかがい知れない、すべてを諦めたような……けれど、単なる自殺志願には思えないその表情が、キミにはなぜか気になった。

▼セリフ：ルシア

「あなたが『①カタナ』さんですね。凄腕の殺し屋だとお伺いしました。ひとり、殺してほしい人間がいるんです」

「標的は、ルシアという女性。……私です。明日からならいつでもいい。ただし、条件がひとつ」

「必ず、殺されたことが誰にでもわかる場所、誰にでもわかる殺し方で……万が一にも、生きている、なんて思う人がいないように殺してください」

「それと、私の命はもう長くない……病気、なんです。だから、必ずその前に終わらせて」

「報酬は前金で1ゴールド。成功報酬は1プラチナム。私の生体反応がなくなったら追加報酬がおりるようにしておきます……受けて、もらえますよね？」

◆結末

「……ありがとう。あなたの腕、信頼しています」

『①カタナ』が依頼を受けると、それだけ告げてルシアは去ってゆく。彼女は結局、一度も表情を変えることはなかった。

【ＰＳ：ルシアの願いを叶える】を渡し、演出を確認してシーンを終了すること。

●オープニング2：少女は求める、最強の盾を

シーンプレイヤー：『②カブト』

登場：不可

◆解説

『②カブト』のオープニング。ルシアが訪れ、自分を護衛してくれるように依頼する。

◆描写

その日、キミの行きつけの店に現れたルシアと名乗る少女の奇妙な依頼。

それは、護衛されていることが誰にもわからないように、護ってほしい、というものだった。

依頼の内容もそうだが、それ以上に奇妙なのは彼女の表情だ。

キミではない誰かへの蔑みもあらわな、けれど、その奥に悲しみを秘めたようなその表情が、キミにはなぜか気になった。

▼セリフ：ルシア

「『②カブト』さんですね。あなたを腕利きと見込んで、依頼があるんです」

「私を護ってください。明日から、どんな理由にせよ、私が死ぬまで」

「安心してください、そう長い仕事にはなりません。私はもう長くありません……病気、なんです」

「条件がひとつあります。護衛されていることが、誰にもわからないように……難しいかもしれないけれど、一流と言われるあなたなら可能なはず」

「報酬は前金で１ゴールド。終了後に１プラチナム。私の生体反応がなくなったら追加報酬がおりるようにしておきます……受けて、もらえますよね？」

◆結末

「……ありがとう。あなたの腕、信頼しています」

『②カブト』が依頼を受けると、それだけ告げてルシアは去ってゆく。彼女は結局、一度も表情を変えることはなかった。

【ＰＳ：ルシアの願いを叶える】を渡し、演出を確認してシーンを終了すること。

ルシア

ミストレス、マネキン◎、トーキー●

▼解説

「あなたの腕、信頼しています」

ストリートの少女。あるストリートの大物と愛人の間に生まれた娘であるが、生来病弱でありベッドを離れられない生活を送ってきた。なお母親が彼女を生む前に父親である大物の元を離れたため、父親は彼女の存在を知らない。

死んだ母が遺した金を頼りに暮らしてきたが、シンデレラ・シンドロームを罹患。自分の残り時間が短いこと、そしてそれを利用しようとしている何者かがいることを知り、その陰謀を砕こうとして今回の依頼を行った。

リサーチフェイズ
RESEARCH PHASE

●イベント1：もうひとつの影
条件：リサーチ最初のシーン
シーンプレイヤー：『①カタナ』
登場：〈社会：ストリート〉／SR：イエロー

◆解説
『①カタナ』がルシアを狙っている時、自分以外の殺気を確認するシーン。その殺気は確実にルシアに向かっているが、周囲にはエキストラしかおらず源を確認することはできない。(*)

◆描写
依頼通り、ルシアという少女を狙うためストリートにやってきたキミは、雑踏の中で嗅ぎなれたにおいを感じた。

キミと同じ血と殺意の、誰かを狙う殺し屋のにおい。いや、キミにはわかる。このにおいの主は、キミと同じ相手を。ルシアを狙っている、と。

◆結末
だが、出所を探すキミの目に映ったのは、街の雑踏だけだった。このシーンのあと、【殺気の主】についてリサーチ可能となる。

●イベント2：シンデレラのように
条件：「●イベント1：もうひとつの影」の直後
シーンプレイヤー：『②カブト』
登場：〈社会：ストリート〉／SR：イエロー

◆解説
『②カブト』とルシアが街を歩くシーン。

シーンの最後にカブトに目標値15の〈知覚〉判定を行わせること。成功すれば、彼女のつけているイヤリングに盗聴器（トレーサー）（『TND』p268）が仕掛けられていることがわかる。【ルシアのイヤリング】の情報を開示すること。

◆描写1
本来、出歩かない方が護衛はしやすい。だが、ルシアはなぜかキミを連れて街を歩くという。

その表情こそ変わらないものの、足取りはどこか弾んで見える。キミにとっては何の変哲もない街並みを、自分の中に刻み込むように進む姿。

それは彼女自身の言うとおり、残り少ない命に思い出を作るため、なのだろうか。

▼セリフ：ルシア

「『②カブト』さんは、この辺りにはよく来るんですか」
「私は、以前はベッドの上にいることが多かったので……色々なものが珍しいんです」
「もうすぐ失ってしまう景色ですから。すみませんが、お付き合いくださいね」

◆描写2
街を歩き、ウィンドーショッピングを楽しみ、ちょっとした買い食いをする。そんななんでもないことを、一つ一つ確かめるようにする彼女。

ふと、彼女の横顔を見る。耳に光るイヤリングに、キミはふと違和感を感じた。

（※〈知覚〉判定を行わせる。成功した場合）

彼女のイヤリングが、ほんのわずかだが点滅している。……盗聴器だ！

◆結末
ある程度会話をしたら、シーンを終了すること。

殺気の源を確認する事はできない
これは、"エインセル"が〈無面目〉を使用して登場しているためだ。殺気に気づかれた後、"エインセル"も『①カタナ』の存在を確認し退場する。

なお、『①カタナ』が知覚を試みた場合、〈隠密〉〈透明化〉で対抗すること。

このシーンの目的は、自分の他にルシアの殺害を狙うものがいる、ということをプレイヤーに示すことである。一通り演出を行なったら、すぐにシーンを閉じるとよいだろう。

盗聴器
〈知覚〉の判定に失敗すると、なにも見つからない。ただし、次のＲＬシーンで盗聴されているであろうこと自体は、プレイヤーに公開される。

盗聴器は見つけても見つからなくても、ストーリー進行に影響は無い。だが、プレイヤーがどうしても見つけておきたいというのであれば、再度判定をさせてもよい。

●イベント3：アンダー・ダーク

条件：「●イベント2：シンデレラのように」の直後
ルーラーシーン

◆解説

黒幕である、司馬と“エインセル”の会話。なお、このシーンでは黒幕の正体は明かさない。(*)

◆描写

その部屋で、男はひとり、椅子に座っていた。
DAK 画面に映る月並みな医療ドラマだけが、ちらつきながら部屋の中を照らしている。
「それで、なにがいたって？」
唐突に発せられた問いかけ。
だがその問いは、部屋の闇に溶けはしなかった。
「殺し屋だ」
いつの間にか背後に現れていた影が、少女の様な声で、そう答えたからだ。

▼セリフ：謎の二人組

影「名前は確か……『①カタナ』。君が雇ったんじゃないのか」
男「『①カタナ』？　知らない名前だな。第一、彼女にそんなに派手に死んでもらっては困るんだ。なぜお前以外を雇う必要がある？」
影「……でも、ボクは確かに」
男「俺が知るか。……だが、不確定要素は潰しておくに限るな。やれるか？」
影「……別に、あれは欲しくない」
男「そう言うな“エインセル”。最後にはちゃんと、お前はお前自身になれるんだ」
男「そうだ、それともう一つ。ルシアが『カブト』とかいうボディガードを雇ったぞ。……尻尾は出していないはずだが、勘のいいガキだ」
影「……わかった。先に、『カタナ』だね（姿が消える）」

◆結末

「『①カタナ』、か……そいつを動かしているのは、お前か、ルシア？」
クク、と肩を揺らす男の視線の先。
DAK ヴィジョンでは、医者の男がかつて蹴落とした同僚に刺され、驚きに目を見開いていた。

●イベント4：誰がそんなことをしたんだい─“自分自身(エインセル)”

条件：【“エインセル”】の情報を得た
シーンプレイヤー：『①カタナ』
登場：〈社会：ストリート〉／ SR：イエロー

◆解説

“エインセル”が『①カタナ』を襲撃するシーン。
“エインセル”は『①カタナ』の姿になって現れ、《不可知(インセンサブル)》で『①カタナ』を攻撃する。防がれると退場するが、キャストが妨害しようとした場合、カット進行に入ること。(*)

◆描写

雨の中、ストリートを歩く『カタナ』の前に現れた影。まるで闇から浮き出てきたかのように表れたソレは、キミと同じ顔をしていた。
「やあ『①カタナ』。“自分自身(エインセル)”に出会う気分はどうだい」
にまり、と。確かに自分と同じ顔なのに、見たこともないほど狂気に満ちた笑顔を浮かべ。もうひとりの『①カタナ』は、確かにそう言った。

▼セリフ：エインセル

「君になりたいわけじゃないんだが、依頼主が君を殺せというんでね」
「“自分自身”の手で死になよ、『①カタナ』！」
※《不可知(インセンサブル)》を使用
（防がれた）「……！　ちいッ！！（少女のような姿に変わる）」
（倒された）「……これが、“ホンモノ”ってこと……？」

◆結末

「……やっぱり、お前なんかいらない。最初から、ボクが欲しいのはルシアの姿だもの！！」
そう言い捨てると、少女の姿をした暗殺者は再び夜の闇へと消えた。
シーンを終了すること。

●イベント5：告知

条件：司馬のアドレスに向かった
シーンプレイヤー：『②カブト』
登場：〈社会：企業、テクノロジー〉／ SR：グリーン

◆解説

司馬のアドレスを入手し、彼に話を聞きに行くと発生するシーン。司馬はキャストたちに対し、患者の心配をする医者として対応する。
なお、このシーンで司馬が正体を現すことはない。もしキャストが彼を疑っている場合、誠実な医者(ペルソナはタタラ)に見える、と説明して構わない。

◆描写

新星帝都大学附属病院の一角。そこで、その男は待っていた。
司馬紅太郎。ルシアの主治医。
「あなたは、ルシアとは……？」
彼は『②カブト』の姿を見て、怪訝そうな表情で口を開いた。

▼セリフ：司馬紅太郎

（依頼のことを話す）「彼女が、そんな依頼を？」
「馬鹿なことを。確かに彼女は、最近何者かに狙われている気がする、と言っていましたが……不安を抱えると、そう思うことがよくあるものです。私に相談された時も、気のせいだろう、とは言ったんですが」

黒幕の正体
このシーンでは、司馬のペルソナはレッガーである。プレイヤーに聞かれた場合、そう答えること。

“エインセル”とのカット進行
“エインセル”はこのカット進行で神業を使用しない。死亡した場合、そのままシーンを終了する。
舞台裏で司馬が《タイムリー》で蘇生する。

「……ルシアの病は現在治療不可能と言われていましてね。“シンデレラ・シンドローム”、ご存知ですか」
「おとぎ話の魔法は12時で切れるでしょう。あれに例えてそう呼ばれています。正直難しい病気ですよ」
「おとぎ話と違うのは、その先に待っているのが王子様との幸せな結婚などではなく、確実な死、ということです。ですが……」(*)
「僕は必ず、彼女の治療法を見つけてみせる。今、いいところまでこぎつけているんですよ」
（私財をなげうっていることについて聞く）「お恥ずかしい。何しろ症例の少ない病気なもので、研究費も多くはなく。ですが、それもきっと、もうすぐ解決しますよ (*)」

◆結末

「『②カブト』さん、僕からもお願いします。あと少しの間、彼女を護ってあげてください」
そう言って男は頭を下げる。シーンを終了すること。

●イベント6：私を殺して

条件：【“振り返れば奴がいる”】の情報を手に入れた
シーンプレイヤー：『①カタナ』
登場：〈社会：ストリート〉／SR：イエロー

◆解説

ルシアが『カタナ』に連絡を取り、依頼の遂行を促すシーン。ルシアはこのシーンで『①カタナ』に《プリーズ！》を使用する。この《プリーズ！》の効果は、『カタナ』にエンディングまでにルシアを殺すことを約束させる、というものだ。(*)

これはこのシーンでの殺害や《死の舞踏(ダンス・マカブル)》の使用を強制するものではない。

◆描写

深夜。『カタナ』のアドレスに連絡が入る。発信者は、今のキミの依頼主――ルシアだった。
「明後日、ウェンズデイ・マーケットへ行くつもりです」
キミが出ると、彼女はそう、切り出した。

▼セリフ：ルシア

「多分……そろそろ、時間切れだと思うんです」
（“エインセル”のことを話す）「そんなことが……？　もしかして、私を狙っている誰か、でしょうか……」
「あの、依頼のこと、覚えてますよね」
「ウェンズデイ・マーケットなら、場所としては最適だと思いませんか？」
「だから、『カタナ』さん。明後日には……ちゃんと、私を殺してくださいね」※《プリーズ！》を使用

◆結末

「待っていますから。……おやすみなさい」
シーンを終了すること。

●イベント7：The Morning

条件：「●イベント６：私を殺して」の次のシーン
シーンプレイヤー：『②カブト』
登場：〈社会：ストリート〉／SR：イエロー

◆解説

ルシアが『②カブト』に対し、自分の考えを告白するシーン。ウェンズデイ・マーケットへ向かう日の朝を想定している。(*)

彼女は自分がどうやっても助からないことを覚悟しており、そのために『①カブト』を利用したことを謝り、改めて自分が『①カタナ』に殺されるまで、自分を護衛してもらえるように依頼する。

『②カブト』が再度、彼女の依頼を果たすことを決めたら、ルシアは『②カブト』の《難攻不落(インヴァルネラブル)》に《ファイト！》を使用する。

◆描写

「話が、あるんです」
そうルシアが切り出したのは、朝のことだった。その眼は、最初にキミに依頼をしてきた日のように真剣で……そして、罪悪感で溢れていた。

▼セリフ：ルシア

「もう、知っているかもしれませんが……先に、謝っておきますね。ごめんなさい」
「『②カブト』さん。私は、あなたを利用していました」
「あなたのほかに、『①カタナ』という殺し屋に依頼をしています……私を、殺してください、と」
「ご存知の通り、私はもう助からない病気です」
「そして、私の死を、利用しようとしている人がいる……多分、父である人に近づくために」
「以前、私のために義体を用意している人がいる、と看護婦さんが言っていました。でも、私はそんなこと聞いてない。それに……義体化のための検査も受けてないんですよ？　こんなことってあります？」
「私は、私の死を誰かに利用されるのは嫌です。母が、ひとりで私を育ててくれたことを無駄にしてしまう。……だから、決めたんです。誰にも利用させたりしないって」
「母の遺してくれたお金と私の残り時間を考えたら、『②カブト』さんと『①カタナ』さんを雇うくらいの余裕はありました」
「なにもなければ、それでいいんです。でも、本当になにかがあったら」
「これから、ウェンズデイ・マーケットへ行こうと思います。そこで、最期の時を迎えるために」

◆結末

「『②カブト』さん、改めてお願いします。私が『①カタナ』さんに殺されるまで、私のことを……護ってください」　※《ファイト！》を使用
ルシアは深々と頭を下げる。シーンを終了する。

シンデレラ・シンドローム
この会話をしている段階で、まだシンデレラ・シンドロームに関する情報を得ていない場合、ここで情報収集判定をさせるといいだろう。
その場合は、〈交渉〉などでも情報収集が可能とするとよい。（目の前にいる専門家に聞くのだ）

「もうすぐ解決しますよ」
司馬のこの言葉の真意は、つまりルシアの死を利用する事で、もうすぐ莫大な金が手に入る、という意味だ。司馬はその金を使って、シンデレラ・シンドロームの研究を続けるつもりなのだ。
司馬は悪人だが、それでも医者（タタラ）のスタイルを彼なりに貫いてはいる。

ルシアの《プリーズ！》
《ファイト！》では無いので、キャストの神業は増えない。
お願いをするという、やや拡大解釈気味な使用方法だ。これはアクトルールとする。

●イベント7：The Morning
キャストが自分からルシアに矛盾した依頼をしていることを問い詰める、と言いだした場合、先にこのシーンを発生させても構わない。その場合、クライマックスまでの流れを調整すること。

●イベント8：仮面舞踏会

条件：【“振り返れば奴がいる”の表の顔】を調べた
ルーラーシーン

◆解説

司馬と“エインセル”の会話。

ルシアとキャストたちがウェンズデイ・マーケットへ向かうことを突き止め、人の多いところへと向かう前に彼らを仕留めようと動き出すシーン。(*)

◆描写

「ウェンズデイ・マーケットか。厄介だな」

頬杖をついたまま。“振り返れば奴がいる”と呼ばれている男……司馬紅太郎は呟く。

「どうやら、思ったより少しだけ早く、片を付けなければならないようだな……“エインセル”」

その声に、やはり闇の中から現れる、少女の姿。

「ボクがあの子になれる時が来たんだね？」

▼セリフ：司馬と“エインセル”

司馬「そうだ。もっとも、奴らを殺してから、だがな」
エインセル「任せてよ。今度こそ……」
司馬「いや、俺も一緒に行こう。奴ら、俺の正体も突き止めたようでな。口止めは確実にしないとな」
エインセル「……いいよ。行こう」

◆結末

司馬がソファから立ち上がり、部屋を出ていく。

“エインセル”の姿もいつの間にか消えていた。

●イベント9：グリーン・マイル

条件：ウェンズデイ・マーケットへ向かった
シーンプレイヤー：『①カタナ』&『②カブト』

◆解説1

クライマックス直前のシーン。ウェンズデイ・マーケットへ向かう途中のシーン。このシーンで、カタナとカブトが合流することを想定している。

ルシアはふたりに向かい、改めて矛盾した依頼をしたことを謝り、協力を乞う。

◆描写1

ウェンズデイ・マーケットへ向かう途中。人通りの多い道を選んできても、やはりどこかで裏道を通らなければならない。敵が狙ってくるならここだろう、という道に入る直前で、ルシアは立ち止まる。

▼セリフ：ルシア

「『②カブト』さん、『①カタナ』さん」
「おふたりとも、おかしな依頼を受けてしまった、と思っているでしょう」
「本当に、ありがとうございました」
「おふたりのことは、忘れません……て、おかしいですよね。これから死ぬっていうのに」
「でも、忘れません。行きましょう。終わりに、するんです」

◆解説2

“エインセル”が登場し、《突然変異(ミューテーション)》でコピーした《不可知(インセンサブル)》を使用。ルシアを殺害しようとする。カブトが《難攻不落(インヴァルネラブル)》で防いだらクライマックスへ。

◆描写2

ルシアが決意をした人間の顔で促した瞬間。

殺意の風が吹いた

▼セリフ：“エインセル”

「キミを殺すのは“自分自身”さ、ルシア！」

◆結末

舌打ちをし、暗殺者は身を翻して下がる。その先には、道を阻むように自動車が止まっていた。

シーンを終了し、クライマックスへ。

■情報項目

最初に調べられる情報は以下のとおり。

『①カタナ』：ルシア、ルシアの依頼（カタナ）
『②カブト』：ルシア、ルシアの依頼（カブト）

◆ルシア

〈社会：ストリート〉〈コネ：ルシア〉

10　ストリートの少女。唯一の肉親である母を数年前に亡くしており、現在は母の遺した財産で暮らしている。
12　生まれつき体が弱く、永らく新星帝都大学付属病院に入院していた。主治医の名前は司馬紅太郎。→【司馬紅太郎】
14　最新のナノマシン治療により状況が好転、最近退院している。だが、実際にはナノマシン治療の副作用でシンデレラ・シンドロームという病にかかっている。→【ルシアの残り時間】【シンデレラ・シンドローム】
16　ルシアの母が残した遺産は、ストリートでつつましく暮らしていた人間としては信じられないほど多い。高額なナノマシン治療の代金を払ってまだ余裕があるほどだ。なにか秘密があるに違いない。→【ルシアの母】

◆ルシアの依頼（カタナ）

〈社会：ストリート〉〈コネ：ルシア〉

10　『①カタナ』に自分を殺してくれ、というもの。
12　だが一方で、『②カブト』に何らかの依頼をしているらしい。

◆ルシアの依頼（カブト）

〈社会：ストリート〉〈コネ：ルシア〉

10　『②カブト』に自分を護ってくれ、というもの。
12　だが一方で、『①カタナ』になんらかの依頼をしているらしい。

●イベント8：仮面舞踏会

“エインセル”が死亡している場合、このシーンまで（あるいはこのシーン中）に蘇生するのを忘れないこと。

◆司馬紅太郎
〈社会：企業、テクノロジー〉〈コネ：ルシア〉

10　新星帝都大学付属病院に勤める医者。将来を嘱望される天才的な外科医。専門分野はナノマシン治療、および義体治療。

13　誠実な態度で評判であり、清廉潔白な人物と言われている。現在、シンデレラ・シンドロームについて私財をなげうって研究している。→【シンデレラ・シンドローム】

15　[アドレス]を入手。

◆ルシアの残り時間
〈社会：テクノロジー〉〈医療〉〈コネ：ルシア〉

10　彼女の余命は幾ばくも無い。ルール的には、エンディングフェイズの最初のシーン終了時に必ず[完全死亡]する。シンデレラ・シンドロームの治療法が発見されない限り、これを覆すことはできない。(*)

◆ルシアの母
〈社会：ストリート〉

08　ストリートでひっそりと花屋を営んでいた女性。数年前に事故死している。娘のルシアとふたり暮らしだった。

12　元は河渡系の組長の愛人であった。手切れ金を渡され組を出されたが、その後妊娠していたことが発覚。だが、別れた後であったため、その後も決して娘ができたことを伝えはしなかったようだ。

15　ルシアも母の意を汲み、父である組長を頼らずに暮らしてきており、死を間近にしてもその考えを変えるつもりはないようだ。

◆ルシアのイヤリング
イベント中に〈知覚〉判定

15　母親の形見のイヤリングらしい。何者かによって発信機が仕込まれていた。これはストリートの違法ショップで作られているもので、ヤクザがよく使用することで知られている。どうやら、彼女を狙っているのはその筋の人間らしい。

◆シンデレラ・シンドローム
〈社会：テクノロジー〉〈医療〉〈適切なコネ〉

10　ナノマシン治療を行った患者にごく稀に現れる症例。元の病は完治したように見え、日常生活を送ることが可能になるが、数週間後に全身の機能が急停止し死に至る病。

12　新星帝都大学病院のタタラ、司馬紅太郎が現在治療法を研究しており、治療可能となる日も遠くない、と噂されている。

15　だが、そのためには莫大な資金が必要である。稀な症例のため研究に参加している企業も少なく、研究はゆくゆくは行き詰ってしまうだろう。→【司馬の研究】

◆殺気の主 ＝“エインセル”
〈社会：ストリート〉

12　ストリートの殺し屋。普段は少女の姿をしている。ターゲットを原型の残らないミンチに変えることで有名。

15　ヒトニ(*)であり、様々な人物に入れ替わり続けた結果自分自身を失くし、それゆえに自分自身を手に入れることに異様に執着するようになったという。

16　現在は“振り返れば奴がいる”というハンドルの男に雇われ、ルシアという少女をつけ狙っている。→【“振り返れば奴がいる”】

◆司馬の研究
〈社会：企業、テクノロジー〉〈医療〉

13　現在、彼は患者を義体に移すことでシンデレラ・シンドロームを克服する方法を研究している。そのために、ルシア用の義体を発注しているらしい。

17　シンデレラ・シンドロームは、実はナノマシンが脳に作用して全身の機能を止める病気である。彼のやり方では治療は不可能のはずだ。

◆“振り返れば奴がいる”
〈社会：ストリート〉〈河渡系のコネ〉

12　河渡連合と繋がりのある男（レッガー◎）。ルシアという少女を狙い、“エインセル”を雇っている。

14　金に汚く、相手の弱みを握り金を搾り取ることを第一としているクズ。気づけばいつの間にか弱みを握られており逃げられなくなっているところから“振り返れば奴がいる(*)”と呼ばれている。現在、とある組長の弱みを握り、彼から金を搾り取ろうとしている。

18　表の顔があるらしい。→【表の顔】

◆“振り返れば奴がいる”の表の顔
〈社会：ストリート、テクノロジー〉〈河渡系のコネ〉

21　新星帝都大学病院の医者、司馬紅太郎がその表の顔だ。

ルシアの残り時間
実際のところ、多くのプレイヤーはこの情報を非常に重要視するだろう。シナリオコンセプトの項目にも載せているが、やはりシナリオヒロインは救いたくなるのがプレイヤーの性だからだ。
ルシアを救える方法については、エンディングの項目に詳しく記載しているので、RLはアクト前に一読をお願いしたい。

ヒトニ
『TNX』からN◎VAを始めた方の多くは、聞き慣れない単語だろう（それ以前から遊んでいた方も知らないかもしれないが）
ヒトニは、ヒルコの一種である。殺した人間になりかわり、その人間として人間社会に溶け込んで生きている「人似」だ。この内容はプレイヤーにも説明すること。

振り返れば奴がいる
なんとも珍しいハンドルだ。（編集者は最高にカッコいいハンドルだと思う）
気付いた人も多いかもしれないが、このハンドルは元ネタがある。実在のとあるテレビドラマのタイトルなのだ。その詳しい内容を知りたければ、ネットで検索などしてみてほしい。（古いが、けっこう有名な作品だ）
最初のRLシーンの背景で流れていたドラマや、黒幕の正体など、色々ニヤニヤできることうけあいだ。

クライマックスフェイズ
CLIMAX PHASE

●矛盾 -contradictions-

◆解説

ウェンズデイ・マーケットへ向かう途中の路地を《不可触(アンタッチャブル)》(*)で封鎖し、司馬が現れる。

◆描写

ふと気づけば、キミたちの路地の出口が車で塞がれている。そして、キミたちが振りかえったその先、車の中から、ルシアの主治医、司馬紅太郎……“振り返れば奴がいる(ハイエナ)”が降りてきた。

「おとなしくベッドで寝ていればいいものを、困ったシンデレラだ。おかげで、こんな大仕掛けをするハメになった」

その顔は、欲望と憎しみに歪んでいる。

▼セリフ：司馬紅太郎

「知ってるか？　大学病院の給料は安くてね」

「名前を売るにはいいが、それを割り引いても安すぎる。研究にも金がかかるってのに、だぜ」

「ルシアの父親はストリートの大物なんだろう？　娘を助けた医者となれば、随分な金をくれるだろうなあ」

「別に、中身が本物である必要はないだろ？　どうせ生まれてこの方ロクに会っちゃいないんだ」

「さて、お喋りはおしまいにしようか。そろそろ……全員まとめて、死ねよ」

（倒された）「……何……？（信じられない、という顔で倒れる）」

▼セリフ：“エインセル”

（『カタナ』に）「今度は殺す。ボクのことを知ってるやつは、少ないほうがいい」

（『カブト』に）「キミはそこで見てなよ。もうすぐボクがルシアになる。そうしたら、ボクを護ってくれればいいじゃないか」

（断った）「……なら、キミも死ね」

（倒された）「いやだ、誰にもなれないで死ぬのは、いやだッ！！」

◆カット進行

敵は司馬紅太郎と“エインセル”。彼らは１エンゲージでキャストから近距離の位置にいる。

キャストの戦力が十分だった場合、トループ（『TOS』P145の河渡会系ヤクザ）を追加すること。

敵を全員倒したらシーン終了。エンディングへ。

司馬の《不可触》
これにより、このシーン中の人の生き死には、世間には認知されなくなる。ルシアが死んでも、その事実は人々には伝わらない。

エンディングフェイズ
ENDING PHASE

■トゥルーエンディング

以下に示すのは、本来シナリオで想定されているエンディング……すなわち、「ルシアが死亡する」場合のエンディングのシーンである。

もし、何らかの方法でキャストがルシアの命を救った場合、後に示す特殊エンディングの項目を参照すること。

●エンディング１：シンデレラ・タイム

シーンプレイヤー：『①カタナ』＆『②カブト』

◆解説

ルシアが死亡するシーン。キャストがなにもしなくても、ルシアはこのシーンの最後に死亡する。(*)

◆描写

ウェンズデイ・マーケットの雑踏の中。

もう誰に狙われることもない……そう感じたからだろう。楽しげに歩いていたルシアが、突然ふらつき、倒れこんだ。どうやら、魔法の時間は終わりかけているらしい。

▼セリフ：ルシア

「そろそろ、時間みたいですね……」

「『②カブト』さん。ここまで私を護ってくれて、ありがとうございます」

「『①カタナ』さん。約束です。私を、ちゃんと殺してくださいね」

「あまり、いい人生ではなかったですけれど……最後に、あなたたちに会えて……よかった」

◆結末

そして、死の瞬間。彼女は確かに、微笑んだ。

ここでルシアが、神業《暴露(エクスポーズ)》を使用する。(*)

周囲のざわめきが、そこにある死を理解したのだろう。やがて、悲鳴に変わる。

――そして、翌日。ニュースの片隅を、少女の死が飾った。

このシーンの最後に死亡する
病死か、望み通り殺害するか、どちらを選ぶのもキャスト次第だ。ルシアは特に抵抗しないため、宣言さえすれば殺すことができる。

《暴露》を使用する
これはあくまで、一人の人間の死を世界に知らしめるためのもので、ルシアという少女が世界に残した、「自分が生きた証」だ。
この《暴露》によって、カタナが危うくなるような情報は流さないものとする。

●エンディング2：ロンリーガール、グッドナイト

シーンプレイヤー：『②カブト』

◆解説

『カブト』のエンディング。生前のルシアとの会話をキャストが回想している。詳しい時系列はシナリオ上では決めていない。

◆描写

真夜中。ふと、彼女の言葉を思いだす。

「……『②カブト』さんは、どうして人を護る仕事をしようと思ったんですか」

彼女が死ぬ、前の夜のことだ。

突然キミにそんなことを聞いてきた。

▼セリフ：ルシア（生前）

（『②カブト』の答えを聞いて）「『②カブト』さん、らしい気がします」

「私が、色々言えることじゃないと思いますけど」

「私、『②カブト』さんに護衛をお願いしてから。悪夢を、見なくなったんです」

「だから、きっと。死ぬ時も、きっと不安なんてないと思うんですよ」

「変なこと、言っちゃいましたね。……おやすみなさい」

◆結末

そのしばらく後、彼女はキミの前で、微笑んで死んだ。キミは確かに、彼女の魂を護ったのだ。

●エンディング3：葬送の鐘は響く

シーンプレイヤー：『①カタナ』

◆解説

『①カタナ』のエンディング(*)。ルシアの父との会話。なお、ルシアの父はエキストラである。

◆描写

バーでグラスを傾けるキミの横に、白髪の混じった男が座る。

「……『①カタナ』というのは、あなたか」

疲れたように問いかける男の横顔は、どこかで見た面影があった。

▼セリフ：男（ルシアの父親）

「殺して欲しい相手がいる。……と言っても、顔も名前もわからない」

「娘がいた。金を持たせて別れた女が、俺に黙って産んだ娘だ」

「その娘が、先日死んだ。恥ずかしい話だが、それを知ったのは死んでからになる」

「……できれば、娘の仇を取りたい」

「受けて、くれるか」

◆結末

男の問いに対し、『①カタナ』が何かを返したらシーンを閉じること。以上で本シナリオは終了となる。

■特殊エンディング

キャストがルシアを救った場合のエンディングの一例を以下に示す。ただし、ルシアを救った方法によって、相応しい描写は変わってくるだろう。

以下の演出は、シーン立ての参考程度に留めてほしい。ルシアを生き残らせる過程で、多くのプレイヤーは色々と彼女を救う術、救う理由について思案したはずだ。ここから先は、プレイヤーが選び取った結末である。ＲＬは適宜、キャストの行動に合わせてシーンを立ててほしい。

●エンディング1'：シンデレラ・タイム

シーンプレイヤー：『①カタナ』＆『②カブト』

◆解説

トゥルーエンドと同じシーンタイトルの共通エンディングシーン。キャストがルシアを救った場合、その結末が変わる。

ルシアを救う条件は以下のとおりとする。

①ルシアを救うには、神業が必要である。

②治療法が確立していない状態では、《タイムリー》や《買収（M＆A）》で彼女を救う事はできない。（治療の術を準備できない）

③シンデレラ・シンドロームはNPCではない。この為、《死の舞踏（ダンス・マカブル）》などで無力化はできない。

なお、RLの判断はこれら全てより優先される。

◆描写

ウェンズデイ・マーケットの雑踏の中。

もう誰に狙われることもない……そう感じたからだろう。楽しげに歩いていたルシアが、突然ふらつき、倒れこんだ。どうやら、魔法の時間は終わりかけているらしい。

▼セリフ：ルシア

「そろそろ、時間みたいですね……」

「『②カブト』さん。ここまで私を護ってくれて、ありがとうございます」

「『①カタナ』さん。約束です。私を、ちゃんと殺してくださいね」

「あまり、いい人生ではなかったですけれど……最後に、あなたたちに会えて……よかった」

◆結末

そうして、彼女は微笑んで目を閉じた。

死んだように見えるが――しかし、その胸は小さく上下している。

まだ、生きている！

「●葬送の鐘は響く」編者注

正直申し上げると、このシーンは誰にでも対応できる内容ではない。多くの『カタナ』は反応に窮してしまうだろう。この演出を気軽にキャストぶつけるのはお勧めしない。

基本的に、エンディングはキャストが望む内容にするべきだ。プレイヤーにお任せしてしまっていいだろう。

ならば、何故そんな内容をここに載せているのか。それは、これを読んだRL諸君は何となく理解してくれると思う。つまり、「超カッコいいから」だ。

この振りをかっこよく打ち返してくれそうなキャスト（あるいはプレイヤー）がいた場合、是非とも試してみて頂きたい。そして、是非ともその結末を製作者に教えてほしい。

●エンディング2’：奇跡の今日

シーンプレイヤー：『②：カブト』

◆解説

『②カブト』のエンディング。生き残ったルシアとの会話。

◆描写

キミは今、病室にいる。

キミたちの活躍で命は助かったが、検査のため入院しているルシアを見舞うためだ。

「……不思議ですね。本当は、今日なんて、私にはないはずだったのに」

そう呟く彼女の顔は、今はもう、絶望に彩られてはいない。

▼セリフ：ルシア

「ありがとうございます、『②カブト』さん」
「噂通りの凄腕、でしたね。依頼を果たしただけじゃなく」
「諦めていた、未来まで、護ってもらっちゃいました」
「いつか、お礼をします。護ってもらった明日で、きっと、凄いことをしちゃいます。だから……」

◆結末

「楽しみにしていて、くださいね」

そういって彼女は、太陽のように微笑んだ。

『②カブト』の演出を確認し、シーンを終了すること。

●エンディング3’：闇は再び

シーンプレイヤー：『①カタナ』

◆解説

『①カタナ』のエンディング。

ルシアを狙う新たな依頼人が現れる。

◆描写

バーでグラスを傾けるキミの横に、す、と妖艶な女が座った。

「……『①カタナ』、で間違いないわね？」

毒蛇のように微笑む貌は、どこか……知った少女に似ていた。

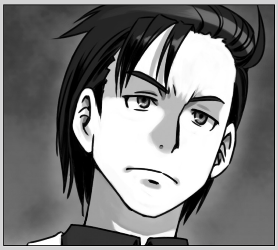
▼セリフ：女（ルシアの義姉）

「ルシア、って娘を殺して欲しいのよ。……と言っても、貌(かお)は知らないんだけど」
「もうすぐ死ぬだろう馬鹿な父親がね、外の女に産ませた娘。どこかでのたれ死んでいるならそれでいいのだけれど」
「生きているなら……ね、わかるでしょう？　遺産は、正妻の子である私のものになるのが筋だもの」

◆結末

「１プラチナム……悪くはないでしょう？」

女の問いに対し、『①カタナ』が何かを返したらシーンを閉じること。



司馬紅太郎

タタラ=タタラ◎、レッガー●

▼設定

「医療ってのはな、金がかかるのさ」

新星帝都大学で将来を嘱望される若手医師だが、同時に裏社会と繋がりがあり、分不相応な野心を抱く男。

▼神業

タイムリー■□　不可触■

▼能力値

理性：8／15　感情：4／10
生命：4／10　外界：8／15
CS：8（AR：1）

▼技能

医療	4♠♣♥♦
交渉	4♠♣♥♦
★射撃	3♠♣♡♦
★自我	3♠♣♡♦
★回避	3♠♣♡♦
※スーパードクター	3♠♣♡♦
※弱点看破	3♠♣♡♦
※緊急手術	3♠♣♡♦
※虚言	2♤♧♡♢

▼武器

・MP21……………隠：12／電：12
攻：P+5　射：近　部位：片手持ち
信頼性の高いオートマチックピストル。

▼防具

・インナーアーマー……隠：16／電：15
・フォーマリティ…………隠：14／電：15
・作務衣……………………隠：10／電：19
〈医療〉の判定を常時+1。

※防（S／P／I）：3／3／5

▼行動指針

セットアップで〈†弱点看破〉。目標値10。成功すると、カット中に敵全員が与えるダメージが+6される。

メインプロセスでは〈★射撃〉〈交渉〉〈†急所攻撃〉の組み合わせで攻撃。達成値は〈虚言〉の効果で+2。武器はMP21。対象に1点でもダメージを与えた場合、【生命】の制御判定をさせ、失敗したら【AR】を-1。

［仮死］［完全死亡］以外の戦闘不能ダメージを受けた場合、ダメージ適用の直後に〈医療〉〈スーパードクター〉〈†緊急手術〉の組み合わせで判定。達成値は+4。受けた肉体ダメージを目標値として判定し、成功したらそのダメージを治癒。（3回まで行える）

“エインセル”

カゲ◎、ヒルコ、カゲムシャ●

▼設定

「ボクが……ボクこそがルシアだ！」

他人に成り代わることを長く続けてきた結果自分自身を失ったヒトニ。自身の個として、ルシアを渇望している。

▼神業

不可知■　突然変異■　神出鬼没□

▼能力値

理性：6／13　感情：7／15
生命：7／14　外界：2／10
CS：10（AR：1）

▼技能

運動	2♤♣♥♢
隠密	4♠♣♥♦
★白兵	4♠♣♥♦
★回避	4♠♣♥♦
※無面目	4♠♣♥♦
※空蝉	3♠♣♥♢
※透明化	2♤♧♡♢
※融合	4♠♣♥♦
※巨体	2♤♧♡♢
※パントマイム	1♤♣♡♢

▼武器

・搭載兵器：岩徹棍……隠：―／電：15
攻：I+11　射：至近　受：3

▼その他

・閃鋼……………………隠：15／電：16
セットアップで【CS】+6
・トリニティビースト…隠：15／電：19
マイナーで使用。そのメインプロセス中の物理ダメージ+3

※防（S／P／I）：0／0／0

▼行動指針

セットアップで閃鋼を使用。【CS】に+6する。

メインプロセスはマイナーでトリニティビースト起動。〈★白兵〉〈隠密〉で攻撃。達成値は〈透明化〉の効果で+2。武器は〈†巨体〉で装備した岩徹棍。ダメージは[I+18]。

リアクションは〈★回避〉〈隠密〉〈†空蝉〉の組み合わせでドッジ。達成値は〈透明化〉の効果で+2。勝利したら【AR】+1。

■本作品について

本作品は、株式会社エンターブレインより刊行された『トーキョーN◎VA THE AXLERATION』や、その関連商品を取り扱った二次著作物（シナリオデータ）です。
『トーキョーN◎VA THE AXLERATION』とその関連商品、および『ゲーマーズ・フィールド誌』は、有限会社ファーイースト・アミューズメント・リサーチの著作物です。
本書の内容はフィクションであり、実在する歴史上の人物、団体、地名などとは一切関係がありません。
また、本書は特定の思想、信条、宗教などを擁護あるいは非難する目的を持って書かれたものではありません。

■利用規定

本作品は無料で自由にアクトに利用することが出来ます。
ただし、シナリオを使用した際には必ず、作者にシナリオやアクトの感想を送ってください。
シナリオ製作者にとって、なによりの励みは感想を貰えることです。
ホームページ（http://dappleox.web.fc2.com/nova/NeuroCrowD/）の各シナリオのダウンロードボックス内のツイートボタンを押し、感想ツイートを投稿してください。
（このため、本シナリオを使用するには twitter アカウントが必要になります）

また、シナリオの利用の際には以下の規約をお守りください。

① シナリオの著作権は各シナリオの作者にあります。
② シナリオの再配布、商用利用はご遠慮ください。
③ 投稿されているシナリオを利用したリプレイやプレイ動画の公開、あるいはコンベンションイベントでの使用など、特殊な使い方に関しては事前に作者に連絡を取り、可否を確認してください。

トーキョーN◎VA THE AXLERATION　投稿型シナリオ共有サイト

Neuro/CrowD

投稿シナリオ No.007 『矛盾 -Sword & Shield X edit』

発行日：2014.11.1

執筆（著作権者）　生方一寛（© ニューロ／ＣＤ製作委員会）
イラスト　ありえすた

企画　ニューロ／ＣＤ製作委員会
ＤＴＰ　まだら牛
素材　Z-design

連絡用メールアドレス：dapple_ox@gmail.com
サイトＵＲＬ：http://dappleox.web.fc2.com/nova/NeuroCrowD/